

京鹿子

平成二十九年三月
三月十一日発行
三月十一日発行

3月号



鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その十八

初 鷄 や 垂 る る 頭 へ 日 の つ つ く
裏 白 や 日 も 当 り た る 社 家 の 門
若 菜 野 に 摘 む 女^め 見 紛 ふ べ き も な し
鷄 日 の ポ ス ト の 口 が 騒 が し い
探 梅 や 空 の 結 び 目 解 い て や る
万 物 の 影 に 戦 く 二 月 尽



鳥 獣 の 巻 物 ほ ど く 亀 鳴 く 夜
蘆 山 寺 の 仮 泊 の 鬼 や 寒 奔 る
史 ほ ど く 御 苑 の 樹 々 の 芽 吹 き を り
頑 な に 閉 ざ す 御 所 門 冴 え 返 る
風 尖 る 愛 宕 比 叡 と 雪 催
北 山 の 紫 が か る 雲 は 雪
春 め く や 無 く て 七 癖 齧 り ぐ せ
朧 夜 の 夫 に あ づ け る 角 ひ と つ

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

荒神口（京七口の一）

草 蔭 の 猫 の 思 案 や 春 し ぐ れ

こ の 道 の あ の 風 に 逢 ふ い ぬ ふ ぐ り

荒 神 口 す た す た 抜 け て 寒 日 和

— 追 懐 — （そ の 二 十 八 ）

初 夢 に 色 あ れ ば 今 鳥 は 翔 ち
〔平成十二年作〕

風 師 きて 羽 目 を は づ せ り 初 雀
〔平成十二年作〕



—
近 詠
—

和田 照海

野風呂岬



初 景 色 座 り よ ろ し き 野 風 呂 岬

初 御 空 門 浪 の 渦 の 傾 ぎ つ つ

舟 靈 に 綿 津 見 の 日 矢 鏡 餅

鶏 鳴 に 干 割 れ 兆 し の 鏡 餅

澄 む 凧 に 糸 次 々 と 渡 さ る る

英華採集

長の目になりきつてゐる冬の鷺

三原松井鶴子

身じろぎもしない鷺は、果して何を考えているのであろうか？命をつなぐ策餌的な行動の故であらうか？と人の目は興味本位に鷺を追うことがある。掲句の作者は、冬の鷺の目は長の目であると言いつつ切っている。厳しい寒さに耐える冬田をまるで見守るかのようである。比喩的な表現ではない小気味よい断定に爽やかな読後感が生まれる。

荒し男の点になるまで大花野

福山平田啓子

花野の中において映えるのは、男女どちらと問えば女と大半の人が答えるであろう。美しい女性ひとなら尚更に違いない。しかし、掲句は男性に注目をし、しかもハードボイルド的な荒し男である。本来なら益荒男と言うべきところであるが、やや美称な表記では花野には付き過ぎとなる。荒し男の存在感は、「点になるまで」の措辞が効果的である。

百舌日和奈良井の宿は峠越え

京都青木薫

長野塩尻にある奈良井宿は、中山道三十四番目の宿場として木曾路において標高が最も高い位置にあり、難所の鳥居峠が控えている。江戸時代には奈良井千軒と言われ、数々の土産物屋が軒を並べて宿場町として活気を呈していた。季語の「百舌日和」が的確に置かれている。

松本 鷹根



息白し

神丘のここが頂息白し

師を慕ぶ白山茶花の神の苑

茶の花にそつと陽が差す内緒ごと

つつがなし庭の万両絵手紙に

産土の楷火にほぐす歳の量

近 詠

塩貝 朱千

大舞茸

群像にひとりを探す枯はちす

子世代といへど老樹に冬芽かな

舞ひたくて大舞茸を真つ二つ

声立てて笑ふ舞茸を雫る

冬雲や消防団が雨降らす



神麓集

竹の直 藤岡紫水

失せしもの探すいらだち暮れ早し
ポインセチア甘え鳴きする鳩時計
切干の日毎に縮む荒筵
沈みゆく日輪太し枯木立
松の曲竹の直佳し今朝の春

ふらここ 沼田巴字

野風呂忌や水は大河として流れ
日の明り水の明りや葦の角
啓蟄や地に生くものに苦難あり
夕霞死者を弔ふ寺の鐘
ふらここや漕げばあかあか空が燃え

海霧 丸井巴水

水餅の水替へ機嫌良き白さ
寒造り終へ青年に嫁ばなし
軍港の海霧に逆らふ鷗の列
寒鰯の定食妣はセピアにて
熱爛が取り持つ屋台膨れだす

枯木立 植村蘇星

頃合ひの風に日輪吊し柿
年惜しむ入相の鐘里ごころ
加齢てふなりの夢あり年惜しむ
賤は無しヘソクリも無し年の暮
共存の一切無心枯木立

つらつらと 北川孝子

毛糸編む想定外の今を生き
虚と実のあはひにころがる毛糸玉
蜜柑むく頼るこの身をたよられて
木の橋のほどよき硬さ毛糸編む
つらつらと昔の恋に黄葉降る

冬の虫 直江裕子

厚菊の孤独人目に立ちつくす
小春日や知らない妻が浮かんでる
大きな海かかえて眠る冬の虫
残る日が少しあるから狂えない
冬の金魚ある筈もなき風の音



神麓集

小骨 高木晶子

一大事書くことは無き日記買ふ寸分も狂はぬ時計むかご飯桜紅葉に座して喜劇のフィナーレ小骨にもうま味のありて年忘れ夕雀合唱曲で年を越す

夜夜積る 伊藤希眸

冬ざくら前世もをんな首ほそし鮫鱈裂く肝一升を抜き出せり夜夜積る枯葉かさこそ浄土かな木の実踏む命のかたち糺しつつ冬の星指の先まで血の通る

ピアスの鈴 木戸渥子

新鮮でない新聞を読む夜長セーターを脱ぐピアスの鈴がひつかり咳発作記憶の回路ばらばらに炎症といふ一大事うつた姫十年無理この先三年日記とす

お菓子の城 奥田筆子

お菓子の城一つづつ持ち秋の丘亡命のやう客布団引つかぶりメニユーの狸うどんが走り出す節穴を出てゆく冬の蠅新婚ガム噛んで禁欲的なシクラメン

冬銀河 井上菜摘子

寒月光蛇の眠りに及びけり家族にてときに酸欠冬銀河湯ざめするノートに下手な思考跡冬夕焼まづ片づけるパイプ椅子毛糸玉も嬰もころがし転がれり

夢ふつつか 村田あを衣

ままならぬ省略鳩のまた潜る逝く秋や連結はなす一輛車やはらかく生きむマフラー編みはじむ喪歸りの黙秋蝶を遠見せり夢ふつつか風に透きたる冬桜



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

長の目になりきつてゐる冬の鷺

散りもみぢ卒塔婆小町の文の数

破蓮の底の陽光鏡とす

あるなしの風の初恋冬桜

荒し男の点になるまで大花野

冬耕のほかはなすことなき在所

柿の種ひとつ零して夕鳥

レノン忌や水平線の模糊として

百舌日和奈良井の宿は峠越え

冬隣るとなりの音の小さくなる

三原 松井 鶴子

福山 平田 啓子

京都 青木 薫

人恋し「かにかくに祭」秋深む

深秋やそぞろ歩きの奈良井宿

枯野ゆく風のやさしく背を押さる

師も白衣吾も白衣や冬安居

帰国までカウントダウン冬の星

機上にて感謝のリスト師走かな

見渡せば葉の色多あり秋の空

カサカサと落葉追ひけり庭の栗鼠

木の葉散るみどりの芝に描くごと

庭の中みつけし枯葉葉にと

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

桜紅葉散る海添ひの散歩道

酒田 藤波 松山

落葉ふむ明日雨の予報あり

初物の松茸つくし花御膳

枯蔦やへばり附きたる古土蔵

村楚楚と湖の際まで鴨の陣

習志野 上野 紫泉

冬薔薇を今朝数へれば十五輪

歳晩や遠富士こつと浮き上がる

なつかしきソングは一人クリスマス

渡川 東 秋茄子

召されし友を思ひつゝ小雪道

着信あり柞散らざるゆとりかな

母手作りちやんちゃんこで妹の守

鯉起しまた津軽富士身を隠す

船橋 元橋 孝之

サル年去りトリ年そこに一人で

初生りの柿は野鳥に捧げやう

先見えぬ米国の道雪催ひ

さいたま 神田 惣介

鉢植の大菊競ひ門香る

散紅葉心残りの破棄し文

空き家らし荒れたる庭に柿実る

いくつから長寿と称す散紅葉

金子 正道

雨上り路端に這つて咲く野菊

旧札のまじるへそくり漱石忌

京上ル下ル小春の交差点

千葉 高野 春子

神の旅メトロノームが動かない

眉と目の化粧念入り大マスク

わしわしと嘴太鴉霜の花

大熊手高々と揚ぐ得意顔

東京 野中 圭子

縄文の森がねぐらや建国日

羽子板市横目に抜けて神谷パー

昼月や風にさ繕りて芒原

布川 孝子

落葉踏む目を閉ぢながら深呼吸

日短待たされてをり齒科の椅子

冬迎ふガラスの皿は包み置く

小学生に人生の質問のあり冬館

丹羽 武正

そぞろ寒背のフアスナーの行き詰まる

落ちさうな枯葉一枚ガラス窓

秋神輿押して引いての痛み分け

松戸 岡山 敦子

梵鐘に法要中と石路の花

蒼天や日ごと移ろふ黄葉道

踏む音で確かめもした霜柱

逆転のトランプシヨック神の留守